様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３７２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０７５４

研究課題名（和文）幼小連携からみた小学校低学年の体つくり運動に関する検討 - 関係発達論を視点として -

研究課題名（英文）Study on "Physical Fitness" for the lower grade of elementary school from the viewpoint of connection and cooperation between kindergarten and elementary school

研究代表者
松本　大輔（MATSUMOTO, Daisuke）

西九州大学・子ども学部・准教授

研究者番号：２０６２４４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「『体つくり運動』の一層の充実」に向けて、低学年の「体つくり運動」について幼小連携の視点から考察し授業づくりの視点を明らかにていくことを目的とした。
　小学校低学年の「体つくり運動」においては、運動による自己理解を学習内容の柱とし、子どもそのままの姿を大切にしながら運動の「遊び」としての面白さを追求していく目的的な活動を大切にすること。またその追求の過程の中で動きを工夫したり、用具や場を工夫したりするという体験的な運動の「遊び」が体育的な「学び」としての運動へと変化していくといった学習過程を大切にすることが重要な授業づくりの視点であると捉えられた。

研究成果の概要（英文）：Purpose: This study aims to consider "Physical Fitness" for the lower grade of elementary school from the viewpoint of connection and cooperation between kindergarten and elementary school. The based on this study is the relational development theory and the focus on this study is relation between play and learning.Result: The points of the class design of “Physical Fitness” for the lower grade of elementary school were found. 1) The learning contents are self-understanding as physical activities. 2) Importance of the pursuit of the purpose activity as play. 3) Facilitate to change play into learning

研究分野：体育科教育

キーワード：体つくり運動　幼小連携　関係発達論

１．研究開始当初の背景

(1) 平成 20 年 3 月 28 日に新しい小学校学習指導要領が公示された。20 年ぶりの改革ともいわれる今回の学習指導要領の改訂において、小学校体育科で注目すべき点の一つに、従前の学習指導要領では高学年からの指導であった「体つくり運動」をすべての学年で指導するものとしたことが挙げられる。このことは、近年の子どもたちの体力低下や、いわゆる“運動実施の二極化”といった問題の解消を目指したものであり、「体育科改訂の要点」として、体力向上のため「『体つくり運動』の一層の充実」(文部科学省,2008,p.5)が挙げられていることを考えれば、体育科が抱える問題の解決に向けて、「体つくり運動」が果たすべき役割は大きいといえる。さらに平成 21 年 4 月から移行措置として低学年体育の内容を前倒しして実施するようになった。このことは、「幼児教育との円滑な接続を図ること、体力の低下傾向が深刻な問題となっていることや積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘があること、各学年の系統性を図ること」(文部科学省,2008,p.4) という改善の具体的事項において述べられていることとの関連が推察される。このように体力低下や系統性の問題に関して、低学年で「体つくり運動」が新設されたことは、上述の指導要領の改訂の要点や改善の事項との関連から考えても、基本的な動きを培うという点で重要であるためと言えよう。

こういった背景を受け、体育科教育研究においては「体つくり運動」に関する研究が、現在、盛んに行われている。例えば、徳永(2009)や松本(2009)は低学年の「体つくり運動」においては「運動遊び」であるという点を考慮に入れ、ゲームや競争を取り入れた授業づくりの工夫を行うことの重要性を述べている。また長谷川(2009)や松本(2011)らは多様な動きのおもしろさそのものに着目した授業づくりの視点を提示している。同様に細江ら(2011)においても、動きの「感じ」と「気づき」に着目した授業づくりの重要性を指摘している。これらの研究は、低学年の「体つくり運動」においては、ややもすると、児童の興味・関心を欠いた単調な動きの反復に終わってしまうことで、授業において「ラーニング」ではなく「トレーニング」が行われてしまう、といった危惧を問題の背景として進められ、「ラーニング」としての「体つくり運動の一層の充実」という視点から授業内容を検討し「体つくり運動」の授業づくりの視点として一定の効果を挙げつつあるといえる。

ところがこれらの研究において系統性の問題については未だ議論が深められていない。特に「幼児教育との円滑な接続」という視点に対しては研究が進められていないといってよいだろう。「体つくり運動の一層の充実」という体育科の課題を本質的に検討するのであれば、“低学年の”といった枠組みで考えるのではなく、幼小連携の問題として「体つくり運動」の内容を検討していくことが、今後の系統性といった問題に対する研究の基礎研究として重要であると考えられる。つまり、小学校体育科の「体つくり運動」の系統性を検討する際に、幼小連携という視点から検討することが今後の体育科教育研究としての基礎的研究として必要度の高い研究課題となっていると考えられる。

(2)いわゆる「小 1 プロブレム」(新保、2001)という言葉で表わされるように幼小連携の重要性についてはこれまでも指摘され、幼小連携問題については多くの実践研究も進められてきている。にもかかわらず、現在もなお幼小連携の問題は声高に語られている(鯨岡、2011)。このことは平成 20 年に告示された新幼稚園教育要領や新小学校学習指導要領からもうかがい知ることができよう。

幼小連携の問題点についてはこれまでも発達的視点、制度的視点という側面から研究が進められている。このどちらの研究の視点においても、ややもすれば、幼稚園教育を小学校教育の準備教育としてとらえる傾向にあるといえよう。つまり「小学生にしていく」という表現に代表されるように小学校教育のスムーズなスタートが連携の目的として捉えられているといえよう。鯨岡(2011)はこの小学校教育のスムーズなスタートは連携の目的ではなく、主体としての育ちの連続性に焦点を当てることが重要だと述べている。こうしたこれまでの幼小連携に対する批判には発達の見方が影響しているといえる。鯨岡をはじめ、佐伯(1996)や石黒(2003)はこれまでの発達の概念を個体能力主義であると批判し、関係論的アプローチによってとらえる事の重要性を主張する。個体能力主義における発達の見方においては、大人が“教え込む”(佐伯、1996)ことや、“させる”(鯨岡、2010)ことで客体としての子どもの育ちを捉え、就学後には何が出来ていなくてはならない、という観点から子どもの発達を捉えることになる。そしてこのような発達の考えを中心として、子どもを「小学生にしていく」為には、という制度的な視点により幼小連携の問題が扱われてきた。その為、幼小連携の問題は形式的な枠組みの問題として語られることが多く、いわば、制度のすり合わせによって幼小連携が行われているといえよう。

しかし、鯨岡らの関係論的な発達の見方に立ち、子どもの主体としての育ちの連続性に焦点を当てることが幼小連携の問題おいて重要な視点であるといえよう。

２．研究の目的

本研究では幼小連携という視点から小学校低学年の「体つくり運動」についての検討を行うことを目的とする。そのため関係発達論(鯨岡、2010)を視点とし、幼小連携の問題

について考察していくこと。そして考察された幼小連携の知見を基に、小学校低学年の「体つくり運動」の授業の内容を検討し授業づくりの視点を明らかにていくこと。これらのことを通して、「体つくり運動の一層の充実」という今後の体育科の課題における系統性の問題に対し、基礎的な知見を提言することとする。

３．研究の方法

本研究は以下の三点を主たる研究の方法として行った。

(1) 幼小連携研究校の実地調査及び意識調査による現状の把握と課題の創出
(2) 先行研究の検討及び実地調査の結果より幼小連携による小学校低学年の「体つくり運動」の授業づくりの視点の理論化
(3) 授業づくりの視点からの授業実践研究による子どもの学びの分析

４．研究成果

(1) 幼小連携においては、子どもの自主性や主体性を連携の柱に置き、学びの連続性を捉えるといった観点からの研究が多く、その中では、単純な小学校での滑らかなスタートを目標とするこれまでの幼小の接続期といったミクロな視点ではなく、幼小中の 12 年間を一つのカリキュラムと考えるマクロな視点の重要性が明らかとなった。しかし、小学校段階においては、主体的に学ぶなどの目標と、各教科の教科の特性や授業のねらいとの関係が曖昧であり、主体的に学ぶという学び方と、何を学ぶのかといった教科のねらいとの差異が曖昧であるという課題が把握された。この課題からは、内容について学ぶ面白さが必然的に主体的に学ぶことにつながっているという関係の整理という視点が明らかとなった。

また小学校低学年の「体つくり運動」の授業実践においては、運動自体の経験という側面と学習内容という側面の関係性が曖昧であることが課題として明らかとなった。さらに、小学校教員に対して行った小学校低学年の「体つくり運動」の授業実践に関する意識調査からは、幼小連携の意識が極めて低いこと、小学校低学年の「体つくり運動」の具体的に学んでほしいことという内容論に対して難しさを感じていることが明らかとなった。

(2) 幼小連携という視点から幼稚園の運動遊びに関する領域の活動、小学校低学年の「体つくり運動」の授業に関する先行研究の検討及びに横断的な授業観察を行った結果、幼稚園の運動遊びが発育・発達を基盤とした内容論を中心に展開されているのに対して、小学校低学年の「体つくり運動」は授業においては、方法論や指導論が中心に展開されていることが明らかとなった。このような研究及び実践の観点の違いによる低学年の「体つくり運動」の内容論の不明瞭さが幼小連携における小学校低学年の「体つくり運動」という枠組みを超えた、小学校低学年の「体つくり運動」の課題であるといえる。つまり，今後の小学校低学年の「体つくり運動」の授業づくりを構想していくためには，授業の行い方や，活動の工夫という“授業づくり”の検討から，学習者が何を学習するのかといった“学習内容”の検討へと視点を拡げることが重要であると考えられる。これらの課題を受け、小学校低学年の「体つくり運動」の授業実践の視点として内容論及び特性論から検討した。

(3) 特性論において「体つくり運動」の運動は心身の健康や体力にとって必要とされる運動として「必要の充足を求めて行われる運動」へと分類される(松本,2013)。つまり、「体つくり運動」の学習では、その心身の発達の必要において、運動が選択され授業が展開されていくことになる。しかしこれまでの研究の多くが例えば、体力テストの結果から数値的に低い項目を学習者にとっての必要な運動として捉え、教師主導で授業を展開していくことが多く、子どもにとってその必要性が必然性となっていないことが多いと言える。特に小学校低学年では体力の要素の必要性を理解することは難しく、またその理解を将来に役立つという視点から説明することも難しいと考えられる。こうした問題が小学校低学年の「体つくり運動」の内容論の不明確さにつながり、運動を経験させるだけの授業、または教師の教え込みといった二項対立を生み題している要因であると考えられる。

つまり「体つくり運動」における必要性と運動の関係を自分への気づきや自分の内側から学習者自身がその運動への必要性を感じ運動とかかわっていくという視点へと転換することで、“この運動がどうこう”という語りではなく，“この学習者にとってはこの運動はどうこう”という常にその運動を行っている学習者との関係から捉えられるものとして「体つくり運動」の運動を捉えた。

以上の考察から「体つくり運動」の学習内容は動きづくり（行い方の工夫）、場づくり（場の工夫）、関係づくり（人数や用具の工夫）を通した、自分づくりの学習であると結論付けた。

(4) 自分づくりの運動としての「体つくり運動」の内容を幼小連携の視点から考察し、低学年の「体つくり運動」の授業づくりの視点について考察した。

①関係発達論的な視点「小学生になっていく」という視点

鯨岡(2011)によれば子どもという存在は「ある」という今の姿から将来成長していく「なる」という存在であるとしている。そしてこの「ある」と「なる」が常に循環しながら成長していくとする。この際に、「ある」

という存在そのものを認めつつ、子ども自身が他者やモノと関わりながら「なる」に向かっていくことが重要であり、この「なる」へ向かう子どもの学びこそが主体的な学びであり、それを関係性の中で支えることこそ教育であるとしている。

こうした関係発達論的な学びを視点として考察すると、幼小においては制度的な差異をむしろ積極的に受け入れつつ、その差異の中で関係論的な発達としての学びの連続性としてどのように構成されていくのかといった、「小学生になっていく」という視点こそが重要であるといえる。このように本研究では子どもの学びをつなぐという視点から授業を検討していくこととした。

②目的的な活動と教科という視点「体育の授業になっていく」という視点

幼児教育においては、「生活や遊びを通して総合的に」行われるものであり、保育所生活の全体が学びの場として捉えられ、園児は「環境との相互作用」により発達していくとされている。また、教育のねらいにおいてもやはり「幼稚園生活の全体を通して総合的に達成される」とあり、遊び等の活動を中心として教育が展開される。一方小学校学習指導要領では、基本的には各教科の授業が学習活動の中心になっており、年間の授業時間数も決められている。つまり教科学習を中心に教育が展開されるのが小学校教育であるといえる。

佐伯(1987)は就学前の子どもにとって知ることは対象を知ることであったのに対して、就学後は教科を学ぶことになるが、この教科は子どもには理解を超えた話であると指摘する。つまりこうした活動の学びと教科の学びという学びの差異としての学びの連続性を阻害する要因として小学校教育における教科の問題があるといえる。こうした問題は佐伯(1987)が「教科の窓」と呼んだように、幼稚園段階ではその活動自体が目的的な活動であったが、小学校段階では活動自体が教科内容を達成するための手段的な活動になってしまうことの問題といえよう。つまり学ぶ内容が実際の内側からの必然性ではなく，外側からの必然性である。このように幼小接続における学びの連続性に焦点を当てるのであれば、教科を教えるのではなく、児童の内的必然性における目的的な活動としての内容を教えることが重要であろう。それは、体力を向上させるための活動や経験させたい活動として、運動を捉えるのではなく、その運動を行う活動自体が児童にとって意味のある活動となるような授業づくりの視点が重要であるということである。このことを通して遊びが学びへと変化して活動自体の状況が体育の授業と変化していくと考えられる。このように本研究では，運動それ自体が目的的な活動という視点から授業を検討していく事とした。

以上の幼小連携の視点と自分づくりとしての「体つくり運動」の内容論の視点を基に、小学校１年生の「体つくり運動」では、その活動自体を目的とする授業づくりが求められると捉えた。例えば、多様な動きをつくる運動遊びにおいては、物をつかむ、這う、歩く、跳ぶ、走る、転がすなどの体の動きそのものの面白さを子どもが追求する（内側の必然性）ことを目的とするような活動を取り入れる必要があるだろう（こうした運動を経験することが子どもの体力につながる等の外側の必然性ではなく）。このことをふまえて、小学校１年生の「体つくり運動（多様な動きをつくる運動遊び《用具を操作する運動遊び》）」の授業づくりを構想し授業実践研究を行った。

(5)　実践研究「新聞紙と遊ぼう」

この実践では、ある動きを課題としてそれが出来たかどうかという結果のみの面白さではなく、新聞紙と何ができるかなというプロセスを大切にした「遊び」にこだわった授業を行った。この中で子どもが新聞紙と「遊ぶ」ことの面白さを追求しながら「遊び」の工夫を試行錯誤し、「学び」を深めていっている姿がみられた。この実践では授業者が「学び」を無理に設定しなくても、子どもたち自身が「遊び」に夢中になるなかで、自分はもっと楽しく「遊び」たいという必然的な思いで、「工夫する」ということを「学び」だしている姿が見られた。この姿は、「新聞紙で遊ぶ」という姿から体を使って「新聞紙と遊ぶ」姿への変化であった。この新聞紙というモノとどのように「遊ぶ」のかという課題に対して、体を使って「新聞紙と遊ぶ」という体育的な観点はまさに枠組みや状況の問題であり、この「遊び」の枠組みと状況を設定することは、授業者の教え込み（体育的な工夫をさせる）ではなく、工夫や発想を豊かにするためのむしろ子どもの「遊び」としての「学び」を広げることになっていた。つまり自然に体育的な学習に“なっていく”という現象であったといえよう。

これは子どもの今のそのままの姿を大切にしながら、授業者やモノ、仲間との関係の中で今の姿から小学生になっていくそのものの姿であったとも捉えられよう。

(6)　実践研究「投げるを遊ぼう」

４月に「新聞紙と遊ぼう」を体験している子どもを対象に７月に行ったこの実践では、投げ方や、遠くへ投げるといった動きの結果を課題とするのではなく、多様なものを多様な的や課題（遠くへ投げるや上へ投げる）に応じて投げることを工夫して楽しむことを目的として授業構想を行った。授業は、投げる体の動きそのものの面白さを追求する中で、投げる遊びの目的や課題に応じて試行錯

誤しながら自分なりに用具の選択や投げ方の工夫ができるような活動を行った。この実践では、始め、ただいろいろな用具（フリスビーやペットボトル、大小のボール等）をただ投げて楽しんでいた子どもたちが、用具に応じて投げ方を変えたり、課題に応じて投げ方や用具を変えたりしながら運動を楽しむ姿へと変化した。例えば、下の的には、大きく重いボールを転がして投げるや、上の的へは、小さくて重いボールを下から投げる等である。これは「投げるで遊ぶ」という「遊び」から「投げるを遊ぶ」という変化であるといえる。つまり、学び方としての工夫をして楽しむという側面と、モノを投げるという意味（的や課題に応じて投げ方を変える）の側面が一致した授業であった。

(7)　二つの実践研究とも子どものそのままの姿を大切にしながら、「遊び」としての子どもの内側の必然性としての目的的な活動を子どもと追求していくことで、より自分にとって面白い運動を求めて、動きを工夫したり、用具や場を工夫したりするという体育的な学びに“なっていく”授業であったといえる。

それは子どもの「ある」というそのままの姿を大切にしながら今の子どもの「遊び」としての面白さを追求していく過程の中で自己理解を通して子どもは「なる」へと変わり、その変化に対する試行錯誤の共通的な枠組み（体を使って遊ぶ）として教科を捉えることで、体験的な運動の「遊び」が「学び」としての体育の授業での運動へと変化していくといった授業であった。以上の考察より小学校低学年の「体つくり運動」の授業構想においては、運動による自己理解を学習内容の柱とし、子どもそのままの姿を大切にしながら運動「遊び」としての面白さを追求していく目的的な活動を大切にすること。またその追求の過程の中で動きを工夫したり、用具や場を工夫したりするという体験的な運動の「遊び」が体育的な「学び」としての運動へと変化していくといった学習過程を大切にすることが重要な授業実践における基礎的な知見となり得ると捉えられた。

この中で、教科を状況枠組みとして捉え児童の「遊び」を広げることで教科の内容との接点が関係性として構築され、そしてその接点の関係性は、「モノや他者から働きかけられる運動」から、「モノや他者に働きかける運動」への変化という児童の学びの変化として捉えられた。この「モノや他者から働きかけられる運動」から、「モノや他者に働きかける運動」への変化は低学年の「体つくり運動」の一単元の学習過程としてミクロな捉え方と、年間を通しての変化というマクロな捉え方、及びその変化が 6 年間を通してというカリキュラムレベルのよりマクロな捉え方としてのミクロマクロループ(伊丹,2005)として捉えることでより「体つくり運動」の系統性を捉える視点となり得るだろう。こうした捉え方は小学校 1 年生から高等学校 3 年生までの「体つくり運動」の学習内容論及び学習過程論、カリキュラム論といった視点の検討において今後の視点となり得るだろう。

(8)　二つの体つくり運動の授業実践を踏まえ、同じ子どもたちに対して小学校低学年のゲーム領域の授業実践を行った。その結果、他者やモノに働きかける運動という内容の経験が活用された投げ方の工夫や、ルールの工夫、作戦の立案等の低学年のボールゲームではこれまで難しいとされてきた内容への深まりが見られた。つまり低学年の体育の学習内容における「体つくり運動」の重要性が他領域への発生という観点からも示唆された。今後低学年の体育の運動領域においては、「体つくり運動」と他領域の関係を精査しカリキュラムレベルで関係を整理することで質の高い学びを保証する実践の可能性が検討できると考えられる。

〈引用文献〉

①長谷川聖修：従前の「基本の運動」とはどう違うのか，体育科教育，57(5),2009, pp.33-35,
②伊丹敬之：場の理論とマネージメント，東洋経済新聞社，2005
③石黒広昭：心理学を実践から遠ざけるもの，佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭　著 心理学と教育実践の間で，東京大学出版，2003
④鯨岡峻：保育：主体として育てる営み，ミネルヴァ書房，2010
⑤鯨岡峻：子どもは育てられて育つ—関係発達の世代間循環を考える，慶應義塾大学出版会，2011
⑥松本格之祐：「体つくり運動」では何をどう変えなければならないのか，体育科教育，57(5),2009,pp.14-18
⑦松本大輔・濱田敦志：「ワークショップ形式」による低学年の体つくり運動の授業，体育科教育，59(1),2011, pp. 38-41
⑧松本大輔：運動の魅力や楽しさの正体（運動の特性論），学び手の視点から創る小学校の体育授業，鈴木直樹・梅澤秋久・鈴木聡・松本大輔 編著，大学教育出版，2013
⑨文部科学省：小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版，2008
⑩佐伯胖：教科を見直す，東洋・稲垣忠彦・岡本夏木・佐伯胖・波多野誼余夫・堀尾輝久・山住　正己　編　子どもと授業，岩波講座　教育の方法 3，岩波書店，1987, pp.114-148,
⑪佐伯胖・佐藤学・藤田英典：学び合う共同体，東京大学出版，1996
⑫新保真紀子：「小 1 プロブレム」に挑戦する，明治図書，2001
⑬徳永隆治：「多様な動きをつくる運動（遊び）」はどう具体化するか，体育科教育，

57(5), 2009,pp.30-32

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 山崎大志、鈴木直樹、田中克行、成家篤史、松本大輔、佐久間望美、「多様な動きをつくる運動遊び」の指導方略に関する一考察～運動の意味生成に着目して～、埼玉体育・スポーツ科学、査読無、第７巻、2012、43-52

② 松本大輔　自己理解を促す学習評価、平成 25 年度「広域科学教科教育学研究第１年次報告書」、東京学芸大学、2014、58-63　査読無し

③ 久保明広、松本大輔、「新聞紙と遊ぶ」～小学校1年生､4月の授業開きの実践、東書Ｅネット、2014、1-5　査読無し

④ 久保明広、堤公一、松本大輔、児童にとって価値ある体育授業の見える化を目指して－小学校第１学年のゲームについての一考察、佐賀大学教育実践研究第 33 号、2016　401-406

〔学会発表〕（計４件）

① 松本大輔、自己への気づきによる運動の変化と自己評価の変化に関する検討、体つくり運動の学習評価を考えるプロジェクト研究会、2014 年 3 月 2 日、東京学芸大学（東京都小金井市）

② 松本大輔、久保明広、堤公一、体つくり運動の学習内容の検討－自己理解という視点から－、九州・体育スポーツ学会第 64 回大会、2015、9 月 13 日、西九州大学（佐賀県佐賀市）

③ 松本大輔、久保明広、小学校１年生における多様な動きをつくる運動遊びの授業実践についての検討－幼小連携の視点からの考察、九州・体育スポーツ学会第 64 回大会、2015、9 月 13 日、西九州大学（佐賀県佐賀市）

④ 久保明広、松本大輔、小学校１年生のボールゲームに関する一考察、九州・体育スポーツ学会第 64 回大会、2015、9 月 12 日、西九州大学（佐賀県佐賀市）

〔図書〕（計３件）

① 鈴木直樹、梅澤秋久、鈴木聡、松本大輔、学び手の視点から創る小学校の体育授業、大学出版、2013、260 頁（担当：22-50）

② 鈴木直樹、成家篤史、松本大輔他、新しい「体つくり運動」の学習評価の実践、創文企画、2015、176 頁（担当：68-83、143-148

③ 橋本美保、田中智志監修、松田恵示、鈴木秀人編、松本大輔他　体育科教育、一藝社、2016、204 頁（担当：80-85）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松本大輔（MATSUMOTO,Daisuke）
西九州大学・子ども学部・准教授
研究者番号：20624498